

アナログ・モデリングの名機Supernovaのデスクトップ版

by WATUSI (COLDFEET)



NOVATION Nova 208,000円

BassStation、DrumStation Rack、そしてそれらを統括、発展させたSupernovaと次々に“ツマミスト”心をくすぐる製品を発表してきたNOVATION。特にSupernovaは独自の音源方式ASM（アナログ・サウンド・モデリング）により、旬のクラブ・ミュージックに適したファットで“たつ”音色を実現し、人気を集めている製品だ。それらのヒットを裏付けるように、同社のWWWページ(<http://www.novationusa.com>)もイケイケな感じで、SupernovaのOS Ver.3が完成する前に早くもVer.4のリリース内容を熱く語っていたりもした（いったいどんな会社なんじゃい!）。

以前サンレコでSupernovaのレビューを行なったせいか、キーボディストの友人の質問攻めにあつたことがある。その中には、純粋な性能ではなく奥行きはどのくらいかとか、鍵盤付きは日本では発売しないのかとか、音色切り替え時の音切れはどうだなんてのがあつた。そう、みんなライブでこそ“ツマミスト”になりたいのだ。そしてついに、そんな期待に応えるべくSupernovaの“ライブでもお任せよバージョン”とも言える姉妹機、Novaの発売となつた。

コンパクトで操作しやすいボディは
ツマミプレイに最適

Novaの外観はというと、実にコンパクトに整然と配置されているなあというのが実感だ。恐らく操作性を考えてだろうが、やや傾斜が付いた手

前側などは実に薄い。ひと昔前なら「これはシンセのコントローラー部分です」と言っても皆信じたろう。実際僕の使用しているMTRのロケターよりもひと回り小さいくらいだ。この奥行きなら、大抵のキーボードの上に乗せることもできるだろうし、ラックだけでなく本当にちょっとしたスペースさえあれば、手許に置いて卓上型ならではの気合いのこもったツマミプレイが行なえるだろう。やっぱりツマミというのはミキサーやROLAND TB-303を扱うように、上から押さえ付けてグリッと行った方が、肩もこらずに気合いも入るってものだ。

1つ残念だったのは、その重さ。本当に中に何か入っているんだろうかと疑うほど軽いBassStationや、3Uにして3.5kgというSupernovaの驚くほどの軽さを実現してきた同社としては、Novaの4kgは少し重めか。コンパクトになっているにもかかわらず、片手で持ち上げるにはやや困難(?)な重量になっている。まあ、もちろん普通の重さではあるのだが、個人的には“世界一軽いシンセから世界一重いサウンドを”出し続けてもらいたかったという思いが同社にはあるので……。

機能をわずかに簡略化しただけで
大幅なプライス・ダウンを実現

そんなコンパクトなボディの中に、Supernova同様にアナログ・シンセを触つたことのある人ならすぐに理解できるツマミたちが実に分かりやす

く並んでいる。3基のオシレーター+ノイズに2基ずつのLFO、エンベロープ+ホイールをソースとするマトリクス・モジュレーション、12/18/24dB/oct可変のローパス、ハイパス、バンドパスとオーバードライブ付きフィルター、3基のエンベロープ。今どきの標準仕様とも言えるエフェクト・セクションとアルペジエーター・セクション。そしてSupernova同様、そのすべてのツマミ、スイッチ、パラメーターの情報がMIDIコントロール・チェーンとNRPNとして送信可能だ。

Supernovaとのスペック的な違いは、Supernovaが20音ポリ（拡張時44音、Ver.3）/8マルチティンバー/8パラアウトだったのに対し、Novaは12音ポリ/6マルチティンバー/6パラアウト仕様（パラアウトの5、6はヘッドフォンアウトと兼用）となっている点、エンベロープ1（VCA）のツマミがエンベロープ2、3と独立していたのが共有された点、エフェクト・セクションのセンド・ツマミが共有化され、テン・キーが省略された点ぐらい。多少簡略化されただけで10万円以上ものプライス・ダウンを実現させたことは、僕のようなSupernovaのユーザーにとっても複雑な思いがするほどだ（さらに後述するさまざまな新機能も付いた!）。

256音色のプリセットをカテゴリー別に呼び出せ、さらにそれぞれに見合ったデモ・シーケンスが用意されているSupernovaゆずりの素晴らしいアイデアも健在。例えばHardlead系の音色